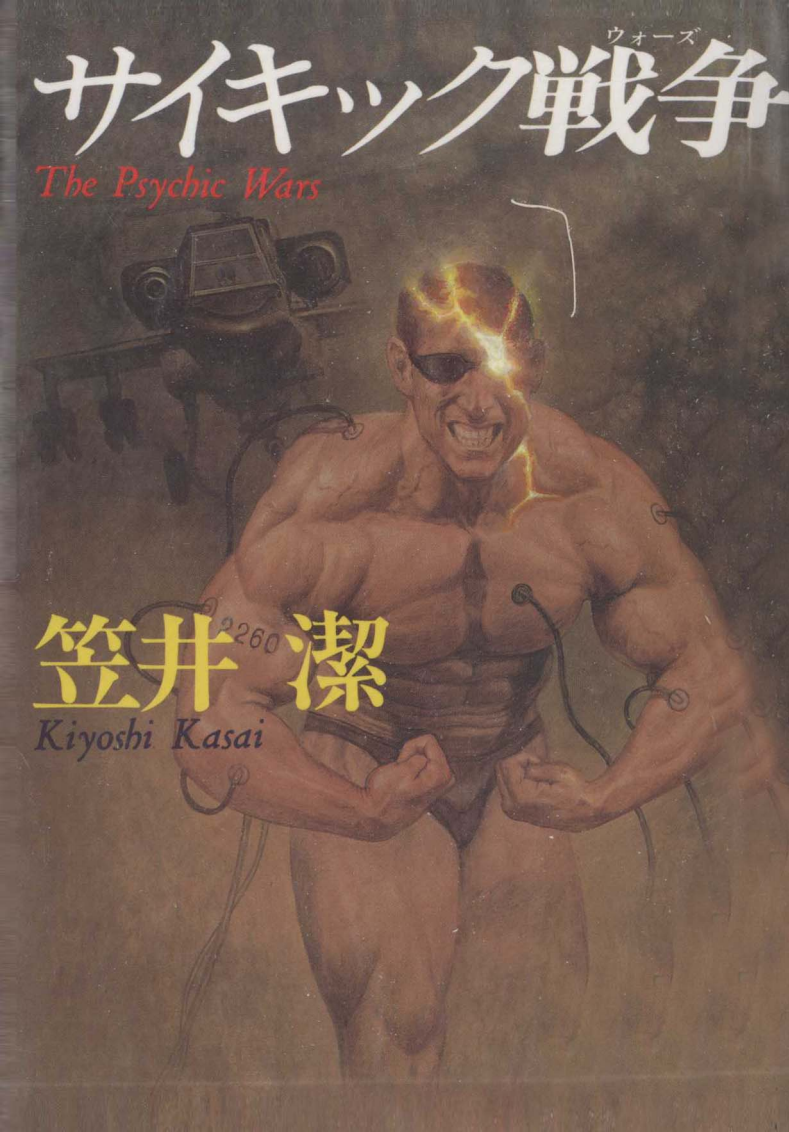
サイキック戦争（ウォーズ）

The Psychic Wars



笠井潔

Kiyoshi Kasai

著者 笠井 潔　1948年、東京に生まれる。1974年、渡仏。パリ滞在中に書いた『バイバイ、エンジェル』が角川小説賞を受賞、衝撃のデビューを飾る。ミステリー、SF、評論にわたって活躍中。主著に『テロルの現象学』『ヴァンパイヤー戦争』『終焉の終り』『哲学者の密室』などがある。

サイキック戦争（ウオーズ）
笠井（かさい） 潔（きよし）
© Kiyoshi Kasai 1993

1993年5月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-01
電話 出版部 (03) 5395-3510
販売部 (03) 5395-3626
製作部 (03) 5395-3615
Printed in Japan

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義
製版——株式会社廣済堂
印刷——豊国印刷株式会社
製本——株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。（庫）

ISBN4-06-185450-X

本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

講談社文庫

サイキック戦争（ウオーズ）

笠井 潔

講談社

目次

试读结束：需要全本请在线购买： www.ert

Ⅰ 紅蓮の海
序章 誘惑 11
第一章 悪夢 16
第二章 失踪 62
第三章 爆破 111
第四章 謀略 155
第五章 猛火 203
終章 脱出 249
Ⅱ 虐殺の森
序章 陥落 257

第一章　捜索　264
第二章　亡命　311
第三章　城塞　351
第四章　襲撃　390
第五章　潜行　429
第六章　死闘　464
第七章　対決　518
終章　崩壊　572
あとがき　575
解説　野阿梓　580

サイキック戦争（ウォーズ）

I

紅蓮の海

试读结束：需要全本请在线购买： www.ert

序章　誘惑

一九七一年一月

灰色に淀んだセーヌの河面を、膚も凍りつきそうに冷たい風がたえまなく吹きわたっている。竜王翔は、石橋の手摺に身を凭せかけ、なにか心を決めかねているように、寒々しい真冬のパリの風景をぼんやりと眺めていた。

午後三時だというのに、あたりは早くも薄暗くなりはじめている。空には濃い灰色の雲が、分厚く、気の滅入るほどに低く、重々しげに垂れこめていた。二十歳ほどに見える日本人の青年は、唇を噛み自分に頷くようにすると、北風にトレンチ・コートの裾を翻して歩きはじめた。ようやく決心したらしい。青年は、心に鬱屈でもあるのかいかにも重たげな足どりで、ポン・ヌフを左岸のほうへと渡りはじめる。

橋を渡り、河岸通りを横切り、そのまま青年は裏町の奥へと入りこんでいく。小さなホテルや骨董店、洋服店などが多い路地裏を辿り、迷う様子もなくサン・ジェルマン・デ・プレの方向を目指して進んでいった。薄闇の漂いはじめた裏町には、寒そうに肩を丸めた人々が、足早に行きかっていた。

サン・ジェルマン・デ・プレ教会の裏手まで出て、青年は地味な雰囲気のカフェの扉を、ため

らいがちに押した。そして店内に入り、落ちつかなげな態度であたりを見渡す。約束の、相手の男はじきに判った。

奥まった、いちばん隅の席に、その男は一人で坐り、サングラスごしに、翔のほうをじっと見つめている。翔は思わず、軽く身震いした。とぐろを巻いた大蛇が爬虫類の瞬きしない眼で、自分をじっと見つめている……。こんなどことなく不気味な連想に、不意に襲われたのだった。

暖房がききすぎて、店内にはむっとするほどの熱気が濃く渦巻いている。軽く目礼し、コートを脱いで席に着いた翔に、男が黙って頷き返した。

そのまま男は黙りこんでいる。翔は気づまりになって、やむなく口を開いた。

「……アンリにいわれてきました。ぼくにどんな用なのでしょうか」

学生運動仲間のアンリが、〈本部〉の人間が翔に会いたがっていると伝えてきたのは、三日前のことだった。

翔は最後まで迷い続けた。もしも〈本部〉とじかに接触すれば、そこで人生が一転するほどに巨大な決断を無理矢理に強いられるという可能性も、考えてみないわけにはいかなかったからだ。全世界に張りめぐらされた秘密の連絡網を、パリの地下深くに潜んで統括しているという〈本部〉との接触のあと、完全に消息を絶ってしまったらしい青年たちについての噂を、もちろん翔は思い浮かべていた。噂では、青年たちは〈本部〉により、南米に、あるいはパレスチナに、あるいはカンボジアに派遣されていったのだろうということだったが、とうぜんのことながらその真相は、深い謎に包まれていて誰にも知りようがない。

翔を呼びだした〈本部〉の男は、見たところ三十歳くらいらしい。フランス人ではない。たぶんスラヴ系の出身だろうと、翔は考えていた。髪はヨーロッパ人に珍しいほどの漆黒で、広い額のうえで綺麗に撫でつけられている。削げた頬と鋭い鼻の線。そして青白い膚に、薄い唇だけ紅でも塗っているようで、異様に赤い。

全体に、貴族的な感じのする美男子といってよかったが、しかしどこか、病的な、淀んだ、忌まわしい印象があって、それが翔に息苦しいほどの圧迫感を与えた。

男の手が静かに動いて、顔を隠していた濃い色のサングラスをそっと外した。翔は思わず、サングラスの背後から現れたばかりの男の眼を、じっと見つめてしまう。それは珍しいことに、金色の光を宿して鈍く輝いていたのだ。

「私が、レジュー・ドールだ」

男の唇が動き、ほとんど聞きとれないほどの声で囁きかけてきた。その艶のある奥深い声にはなにか魔力的といっていい不思議な魅力があって、一瞬のうちに、相手の心を奪ってしまう効果があった。

金色の眼の男……。翔は思わず呟いていた。この男がレジュー・ドールだったのか……。

秘密本部の奥に潜み、世界的な規模の組織を密かに操っていると噂される男、それがレジュー・ドールだった。つまり翔は、〈本部〉の最高幹部によって呼びだされたということになる。男の唇から、またあの囁き声が洩れてきた。

「同志、きみには、日本に帰国してもらうことになる」

「日本に？」
「そう、日本にだ。日本の革命勢力が〈本部〉に援助を求めてきた。きみは、〈本部〉から日本に派遣されるのだ」
「しかし、なぜぼくが……」
「きみには〈力〉がある」
「〈強さ〉が……」
「そう、〈力〉だ。きみの〈力〉を、日本人民が必要としているのだ」
金色の眼が、その輝きを増してきたような気がした。男に見つめられ、翔は金色の炎の渦巻きに否応なく巻きこまれていく、そんな深い無力感に捉えられていた。しかし奇妙なことに、この無力感には、どこかしら人を陶然とした心地にさせるところがあった。金色の眼の輝きに魂を吸いとられていく無力感と、そして妖しい恍惚感のなかに浸りこみながら、翔はいっそのこと、男の誘惑に身を委ねてしまいたい気分になっていくようだった。
「とうぜんのことだが、きみは恋人と別れなければならない。あのカンボジア人女子留学生ときみとの関係は、〈本部〉によって調査されている。きみは彼女と別れ、関係を絶ち、日本に帰国しなければならない。いいかね、これは革命のためだ。革命へのきみの献身と忠誠を証明するためにこそ、きみは彼女との関係を絶たなければならない」
……ソリダと別れる。別れて日本に帰る。男の囁きが、これまで考えもしなかった可能性を、一瞬、翔のまえに開いた。慄然としながらも、その可能性に一気に身を投じてしまいたいという

誘惑が、蜜のように翔の心に粘りついてくる。

ソリダがおずおずと妊娠したことを告げたのは、去年の暮のことだった。それからここ一ヵ月ほどのあいだ、翔に狂いだしそうなほど重苦しい気分を強いてきたあの忌まわしい難題が、男の誘惑に応じることで一挙に解決されうるのだ。翔はテーブルの上のコーヒーカップを見つめた。小さなカップのなかには、冷えたエクスプレスが黒く淀んでいる。

革命のためにソリダとは別れなければならない。

声に出さずに、翔は呟いてみた。負わされていた重たい荷が不意にとり除かれていく解放感で、翔はほとんどうっとりとしていた。その解放感には、どこか後めたさの感覚が混ざりこんでいるような気もしたが、そんなものは無視してかまわない。なによりも、とにかく革命のためなのだ。

「同志、それではいいかね。きみは恋人と別れ、〈本部〉から派遣されて日本へ行く」

男の囁きに、翔はふかぶかと頷いていた。そしてカップを手にとり、冷えたコーヒーを苦い薬でも飲むように一気に飲みほした。受け皿にカップを戻す時、陶器の触れあう音がかすかに響いた。翔の手が、どこか不健康な感じのする興奮で震えているためだった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ert